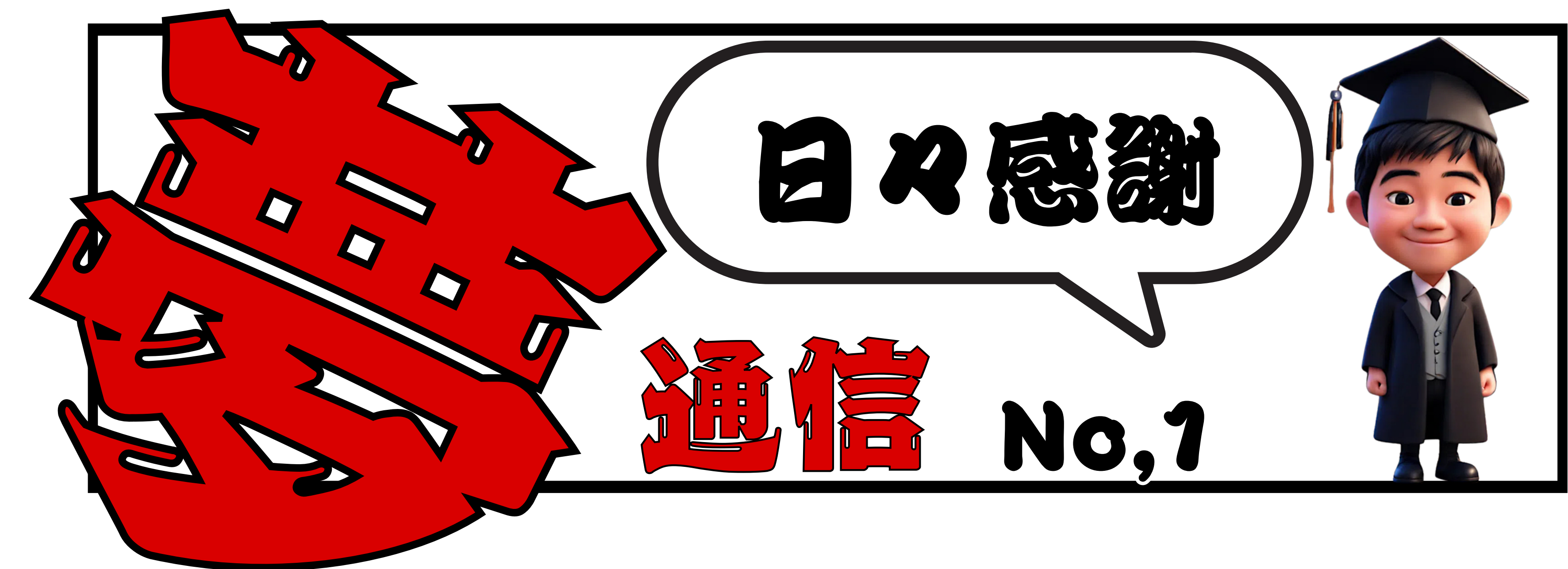




～昨年度はどんな研修をしたの？～

みなさん、入学式や学級開き、NRTや仮入部・・・息つく暇もないまま授業に突入しました。ほんっっっっとお疲れ様です。

少しずつ授業が始まり、新たに来た先生方はほんの少しだけ、落ち着くことができたでしょうか。臼杵も少しずつ参観ができるようになったので、いろんな先生方の授業に行きたいと思っています。

昨年度は京都大学准教授 石井英真先生に1回、今年度もお願いする大阪教育大学准教授 森本和寿先生に2回指導助言をお願いしました。

今回は、石井先生の指導助言をまとめたものを紹介します。昨年度いた先生方も復習を兼ねて読んでください🎵

※動画もありますので、もし興味がある方は臼杵までお声がけください。

1. 「いい学校」づくりのベースと教師の視点

- ・『学校改革』とはいい学校をつくることであり、先生たちの願いや思いを共有していくことが学校づくりのベースです。
- ・卒業する時の生徒の姿をイメージし、そこから学校教育目標とリンクしているか（合っているか）を考える必要があります。
- ・いい学校について、学力が高い学校を思い描く人は少なく、10年前は「生徒が行きたいと思える学校」でしたが、今は「先生が行きたいと思える学校」へと主語が変わっています。
- ・生徒が育っているか、先生が生き生きしているかが問われており、最近の学校は閉塞感が強く、わくわく感が少ない状態にあります。
- ・生徒の生きる姿をすぐに語れる教師がいる学校は伸び、充実することで夢を語ることができます。

2. 生徒の「学習権の保証」と言語生活の向上

- ・生徒は「聞いて聞いて」という内容から「不満感」か「充実感」がわかりませんが、自分一人ではできず、生徒同士で語ることも難しいため、聞く相手を機械的に生む仕掛けが必要です。
- ・学校の中で世界が広がる「学習権の保証」をすることが、生徒の世界観を超えることにつながります。
- ・現代はパブリックコミュニケーションを知らずに身内コミュニケーションをしてしまうため、耳で聞いて漢語を思い描くことが大切です。
- ・子どもの中で言語生活をどのように上げていくかが重要であり、先生が子供みtainな言葉遣いをするのが学校が荒れるきっかけにもつながります。
- ・荒れる学校を改革する場合は、言葉遣いなど文化レベルの底上げが大切です。

3. 学力向上と授業改善のあり方

- ・『教科書を教える』ではなく、『教科書で教える』ことが大切であり、何を学び、何を評価するのか、『学力』をキーワードにしています。
- ・学力向上とは数値を上げることであり、学力保証は生徒が困らないようにすることです。
- ・九九をやっても定着しないのは、使う文化や必要性を感じていないからであり、学習する必要性を考えさせることが大切です。
- ・自己調整学習など横文字の言葉が導入されても、元（ノート指導など）を考えると今までやっていたことと大差ないことが多いです。
- ・授業改善は生徒指導への大本であり、教科指導をすることが生徒指導の懸け橋になります。
- ・現代の授業で問題なことは「ただ座っていること・右から左へと受け流すこと」です。
- ・大人に対する不信の目があると、結果として教師が生徒を見ずに授業することにつながります。
- ・『主体的な学び』から『個別最適な学び』へと移動しており、通常学級の支援学級化が多いため個別最適な学びという流れがあります。

4. 動詞で見る『学び』と教材研究

- ・『学び』があるかどうかは動詞（例：「コピペする集め学習」ではなく「調べ学習」になっているか）で見ます。
- ・『調べ学習』には「私（自分語り）」があることが大切で、科学するとは「はてな」があることです。
- ・考察がうまくいかないのは仮説の設定がうまくいっていないからであり、「自分が何者か」「何をしたいか」というテーマの掘り下げが必要です。
- ・自由進度学習でPDCAサイクルをさせすぎると、「読み深める」という動詞がなくなってしまいます。
- ・理科の実験がただの『作業』にならないよう、「不思議」を持たせる授業展開にすることで自然と生徒同士がつながります。
- ・言語活動では「言葉をひねり出す」「モヤモヤを持つ」ことが重要です。
- ・授業には「めあて（例：案内文をつくる）」だけでなく、「ねらい（例：どんな力が身につくのか）」が必要です。
- ・「こなす」動詞が多いと何を学んだかわからない授業になるため、授業後にどう答えてほしいかイメージすることが大切です。
- ・教材研究はネタ研究ではなく、導入で大きく盛り上げてしまうと後が大変になるため、じわじわと引き込み授業中で盛り上げる場を作ります。
- ・教師の腕を磨くとは、どこでつまづくか、質問に対してどう答えるかなど、子供の姿を鮮明にイメージできるかどうかです。

5. 教師の役割とコミュニケーション

- ・学びの基本は共同注視関係（同じものをともに見ること）です。
- ・生徒が材に集中すると教師は端へ移動し、生徒の発表に見落としや改善を指摘するファシリテーターとなり、同じ目線で見ると伴走者（コーチング）となります。
- ・授業は教師が教える・生徒が学ぶの2項対立ではなく、「材」を介したコミュニケーションです。
- ・学びを支援するとはいかに「材」に没入させ、「もっともっと」という気持ちを持たせるかです。
- ・ICTの活用については、パブリックコミュニケーションと見落としに関するAIドリルの両方をスイッチさせることが大切です。
- ・自分に負荷をかけて行う百ます計算なども大切です。
- ・国語が難しい理由は、生活の中でいかに「大人目線」になれるかが大切だからです。
- ・教室整備について、愛着を持つことが「きれいに保つ」ことにつながり、なんでも「あほ」と言うと敏感さが劣ってしまいます。

6. 授業の技術（板書・発問・間）

- ・発問・説明・指示助言など、教師は立った瞬間から身体で勝負しています。
- ・ベテランと新任の違いは『間（真空状態）』の使い方であり、真空状態に言葉を入れることで生徒が納得します。
- ・パワーポイントは再現性が高くわかった気にさせる（論理がない）弱点があり、話を進めるとスライドを戻さなければなりません。
- ・黒板は横展開にして流れを見せたままにできるメリットがあり、空間の埋め方が授業のミソとなりますが、黒板中心である必要はありません。
- ・授業は「何を残すか」が大切であり、ノート指導とは自分なりの本づくり（手元に何を残したか）です。
- ・学習者目線で「ワークシート」「黒板計画」を作ることが大切です。

7. 授業の見方と「生徒の姿」

- ・大人の学びは『経験学習』であり、授業をたくさん行うことで学びを得られます。
- ・授業は「子ども・教材・教え方」の3つがポイントですが、教え方から入ると授業研究はうまくいきません。
- ・授業を見る時は教室の右横か左横から見て、教師の指示と生徒の活動のズレや、生徒側がどう調整しているかなど、生徒と教師をともに見ます。
- ・一番見るべきところは子供の姿であり、「なぜそうなったのか？」を見ることが大切で、子ども自身から「新たな気づき」がわかることも多いです。
- ・授業参観では生徒の顔（充実して目を輝かせているか、幼さが凛々しさへ変化しているか）から見ます。
- ・グループ学習では、教科書から知識を吸い上げているかなど『何を見ながら取り組んでいるか』が大切です。
- ・教師は生徒の発言を丸め込まず、『オウム返し』をすることで生徒は教師が聞いてくれていると感じます。

最後に・・・

石井先生が話したことをまとめていますが、すべてを覚えたり取り入れて欲しいわけではありません。

ただ、先生方には今まで研修した内容を共有し、西中が何を目指しているのか、どんな研修を経てここにいるのかをわかって欲しいと思っています。これってどういうこと？って気になる部分があれば、気兼ねなく聞いてください！